





こども食堂



新潟県上越市の清里区は、古くから肥沃な土地に農業が営まれ多数の古墳も残る。広い空と田んぼに囲まれたのどかな集落、武士(ものゝふ)地区の一角にある、空き家を活用した多世代が集う地域の居場所「清里いばしよベース Chra-ya」(以下、ちゃや)(代表:高木桂さん)を訪れる。

取材に訪れた8月、夏の日差しの中ちゃやの玄関先でやってくるこどもたちに、ポケモン柄のエプロンを付けた高木真二郎さん・桂さん夫妻が「おはよ」と声をかける。今年の夏、上越市は著しい水不足に見舞われた。節水要請も出ているなか、高木さんは今回のこども食堂の開催を悩んだという。でも、こうした機会を災害時の予防演習と考え、「防災食づくり」をテーマに開催することとなった。

キッチンでは地元の女性スタッフが「今日はなるべく水を使わず調理します」と60人分の夏野菜カレーを手際よく用意。地元の方からいただいた野菜を中心に、ナス、オクラ、ピーマンやズッキーニ、きゅうりの浅漬けが大皿に盛られ、デザートには防災缶詰の菓子パン。水だけで食べられるアルファ米のパックを皿代わりに、洗い物が増えないようにラップも活用するなど、災害時にも役立つ知恵と水不足にも負けずに楽しめる場づくりを図った。

ちゃやの広い和室では、上越教育大学のボードゲームサークルの学生がこどもたちと遊んでいる。学生がカードをかざし「これはなに?」と聞くと、こどもたちが「かばちゃ!」と声を上げる。4年生の出口さんは「遊びのなかでこどもたちのやりたい気持ちを受け止めるようにしている。未就学児と小中学生でも関わり方が違う。こどもたちと直接関わることで、大学で学んだことが身に付いている」と実感しているそうだ。

11時を過ぎると、高齢者施設の方々が来場し新聞紙でマイバッグづくりに挑戦。施設の職員が先生役となり、赤ちゃん連れの若いお母さんと高齢者が一緒になって手を動かしながらお互いに作品を見せ合いな感じでいく様子も見られる。



12時ちょうど、全員で手を合わせ「いただきます」。テーブルに大皿を置き、大人も子どももみんなで取り分けて食卓を囲む。元中学校教員でもある副代表の稲葉さんは「高木さんから地域づくりへの想いを聞いて、地元住民としてもお手伝いしたい気持ちになった。ちゃやが世代を超えてつながる居場所になってほしい。地域の『おやじ』としても責任を果たしていきたい」と話し、活動にいつも寄り添っている。

ボランティアスタッフからは「子どもたちと一緒にツリーの飾りつけをしたりご飯を囲む時間は、自分にとっても大切な居場所になっている」「子育てに関わっていることで自分も元気でいられる」という声も聞かれ、ちゃやは大人が新たな一歩を踏み出す場所にもなっているようだ。

午後、代表の高木桂さんにお話を伺った。高木さんは北海道出身で、東京で福祉の仕事に携わり、発達障害のある人やひきこもりの方たちなど、制度の支援が届きにくい人々に関わってきた。結婚と妊娠を経て、生まれてくる子には自然豊かな土地で育ってほしいと考えるようになり、「海も山も雪も身近にあり、心の豊かな人が多いと感じた」ことが決め手となり、2021年に上越市に移住する。上越市から紹介を受け、清里区で地域おこし協力隊として活動するうちに「こどもの数が減っており、学校が終わると一緒に遊ぶ機会がない。学校と家庭以外にこどもの居場所が少ない」という地域の課題を実感する。

それならば・・・「地域の大人が子どもと関わり、地域全体で子どもを支え、子育てを支える。そんな誰もがつながれる場を作ろう」と、武土地区にあった空き家を拠点にちゃやを立ち上げる。月1回のこども食堂を軸に、親子向け体験講座や夏休みの学習支援、遊び場やフリースペース、さらには民宿としての機能も持ち、こどもから高齢者まで、多世代が集う地域の居場所として活動を広げている。固定されたプログラムでは



なく、その場に集まった「やってみたい」「こうしてみたい」という声を拾って柔軟に形にすることを心掛けて活動している。

活動が地域に根付いていくために、地域の関係者との協力関係を積極的に作ってきた。発起人である副代表の2人も地域住民で、元中学校教員の稲葉さんと、子育て世代として公民館事業や地域活動に関わる勝山さん。スタッフには地域住民を中心に、教職員のOBや社会人ボランティアが関わっている。「人の情報を聞けば、自分から連絡してお会いし、活動の協力の輪が次々と広がっていった」と話す。その結果、こどもの保育園で知り合ったママ友やパパ友の協力、地域のベテランの方が活動を支えてくれたり、大学生が遊びの場を作ってくれたりと協力の環が広がっている。上越市は人との距離が近く、つながりを生かしやすい環境であることを実感している。また、最近行われた地域協議会の住民アンケートでは、こども食堂の存在が質問項目に入るなど、活動が徐々に浸透している手ごたえを感じているようだ。

「ちゃやは、属性の違う人が集うことで誰かが元気になったり、新しい一歩を踏み出せたりする場になりたい。すべてのご縁が大事だと感じています」と高木さん。この場で集う体験が人の感性を育て、何かをはじめるときつかけになればと願う。ちゃやでは民宿も開き、清里のありのままの日常を体験できるように図っている。「地域の情報発信の拠点」として地域の魅力を伝える場になれば、と今後を展望する。

この日のこども食堂も午後2時でお開きとなった。息子の杜真くんが手を振ってお見送りし、大勢の人で賑わったちゃやと武士集落に静寂が戻る。「様々な人を迎え、見送る息子の成長も実感しています」と高木さんは笑顔で語ってくれた。

【連絡先】 清里いばしょベース Cha-ya
https://www.instagram.com/cha_ya.2023/
 メール: chaya.kiyosato@gmail.com